

## 英国における自閉症スペクトラム学生への支援

吉永崇史† 西村優紀美†‡ 桶谷文哲†  
 †富山大学学生支援センター ‡富山大学保健管理センター

Support for Students with Autism Spectrum Disorders in the United Kingdom  
 Takashi Yoshinaga†, Yukimi Nishimura†‡ and Fuminori Oketani†  
 †Student Support Center ‡Center for Health Care and Human Sciences  
 University of Toyama

キーワード：自閉症スペクトラム (ASD)、英国、学生支援

本稿では、英国での自閉症スペクトラム学生への支援の特徴について、英国内の3つの大学およびプロスペクツ（英国自閉症協会が設立した高機能自閉症スペクトラム者のための就労支援機関）への聞き取り調査の結果を基に明らかにする。

### 1. はじめに

英国では、自閉症スペクトラム（以下、ASD）児・者（成人）への支援に国を挙げて取り組んでいる。その中でも、2009年11月に制定されたAutism Act 2009に基づき、大人の自閉症スペクトラム者支援のための政府戦略（Her Majesty's Government, 2010）が2010年3月に公表されたことは、従来の子どもが主な対象であったASD者支援が、成人へと拡充しつつあることを強く示唆している。

英国では、知的に遅れない（以下、高機能）ASD者への支援の取組みも、積極的に行われている。代表的なものとしては、1994年に英国自閉症協会（NAS）によって設立されたプロスペクツ（Prospects）による、アスペルガー症候群の成人に特化した就労支援サービスがある（日本自閉症協会, 2005；鈴木, 2010）。

一方で、英国における義務教育から就労の狭間に位置する高等教育機関での大学に在籍する

ASD学生の支援については、近年になって支援事例やノウハウが公表されつつある（Hughes et al., 2009）が、必ずしもその全容が明らかになっているとは言えない。

そこで、本稿では、聞き取り調査の結果に基づく考察を通じて、英国におけるASD学生支援の特徴を明らかにすることを試みる。

### 2. 研究の方法

本研究では、ASD学生への支援が積極的に行われている英国内での3つの総合大学、ハートフォードシャー大学、シェフィールド・ハラム大学、ケンブリッジ大学に加えて、英国自閉症協会が1994年に設立した高機能ASD者を対象とした就労支援機関であるプロスペクツにおける学生支援プログラムのスタッフへの聞き取り調査を行った。聞き取り対象の大学選定にあたっては、英国自閉症協会からのアドバイスを受けた。

聞き取り調査は、筆者ら（吉永、西村、桶谷）

が、2010年2月24日から27日の4日間に、直接各大学及びプロスペクツを訪問し、当大学のASD学生支援の取組みと筆者の富山大学でのASD学生支援の取組みをそれぞれ発表した後、質疑応答を行う形で行われた。聞き取り調査には、ASD者支援に精通する通訳案内士が同行し、適宜日本語・英語の通訳が行われたため、英国でのスタッフ間との意思疎通は十分に行われた。

調査対象の大学のうち、ハートフォードシャー大学については、同大への聞き取り調査が最初だったこと、また、同大の取組みについての聴取を許された時間が比較的長時間（実質4時間）だったため、事前に4つの質問事項（下記参照）を用意した。

質問1：学内の誰が主な支援に関わっているか？支援者の専門性や役割はどのようなものか？主な支援者は学内の教職員とどのように連携・協働しているのか？

質問2：支援組織の運営資金はどこから拠出されているのか？

質問3：学生に対する支援を開始するための手続きはどのように行われるか？アセスメントはどのようにして行われ、支援を受ける学生の周囲（教職員や他学生）に、どのようにその情報が伝わるか？

質問4：どのように支援の目標設定や支援目標にもとづく評価をしているのか？

その他の大学や機関においても、上記の質問事項を意識した聞き取り調査を行った。しかしながら、聴取時間が限られていたため、ハートフォードシャー大にはないユニークなアプローチについて聴取するよう心がけた。

聞き取り調査の内容は、インタビューの許可を得て全てICレコーダーで録音された。録音内容は英語のまま書き起こされた。それらのテキストを基に内容分析を行った。

### 3. 調査結果1：ハートフォードシャー大学での支援

ハートフォードシャー大学（University of Hertfordshire）は、イングランド東部のハットフィールド（Hatfield）にある総合大学であり、同大の学生総数は約24,000名である。同大において現在支援を受けているASD学生は約30名である。

同大では、従来の身体等の障害学生支援の延長線にはない、ASD学生に特化した支援を行っている。同大の天文・宇宙物理学部に所属する学生への支援をパイロットケースとして支援体制を構築し、現在は支援の対象を全学に広げている。

#### 3-1. 質問1：学内の誰が主な支援に関わっているか？支援者の専門性や役割はどのようなものか？主な支援者は学内の教職員とどのように連携・協働しているのか？

同大のASD学生支援体制は、支援経験が豊富で学識のあるコーディネーターを中心としたチーム・サポートが中核となっており、サポート・メンバーはコーディネーター、メンター、スタディ・スキル・チューター、学部教員、保護者から構成され、それぞれの固有の役割を担っている。

コーディネーター（Disabled Students' Coordinator）は、詳細なアセスメントに基づき合理的配慮事項も含めた支援計画を立案し、支援のためのアグリーメント（Study Needs Agreement）を学生と取り交わす。また、個々の学生へのチーム・サポート管理を行い、必要に応じて支援者間の情報共有の橋渡しを行いながら、支援の改善を行っている。

メンター（Mentor）の役割は、高校からの移行支援、入学直後の適応支援、生活支援、対人関係、履修上の問題への対応など多岐にわたる。メンターの資格は、ASD学生の特性やニーズを理解し、かつ大学運営システムについて精通していることとされる。聞き取り調査時点で、同大ではメンターが6人いたが、ASD学生の増加に伴い、今後もメンターの人数は増えていく見通しである。

メンター同士はコーディネーターも加わったマンスリー・ミーティングを行い支援事例の共有を図っている。加えて、電子メールを活用した情報共有も積極的に行われている。

スタディ・スキル・チューター (One to One Study Skills Tutor) の役割は、スケジュール及び To Do 管理を中心とした修学支援である。同大の担当チューターは特別支援教育の専門家(元教員)であり、学生との対話を重視し、修学上の困難に対する具体的な支援を、個別のかつ教育的に行っている。

学部教員 (Academic Contact) は主に履修のマネジメントを担当し、特に入学直後のサポートを重点的に行っている。その他にも、他の役割を担うサポート・チーム・メンバーと日常的に意見交換している。講義担当教員が ASD 学生に行わなければならない配慮はアグリーメントに明記されており、レクチャー・ノートの事前配布、講義の録音、試験時間延長 (25%の延長が多い)、別室試験などがある。加えて、同大では研究室スタッフへ簡易ガイド文書を作成して配布し、更にアグリーメントを回覧している。研究室スタッフからの ASD 学生支援に関する相談も適宜受け付けられている。

同大では保護者もサポート・チームに参加している。文化的な背景により学生の自立を阻害するとの観点から保護者の意見を受け付けない大学が多い中、同大の ASD 学生支援では、保護者の経験が重視され、支援に活かされている。

チームでのサポートの対象外となっている支援は、心理サポートと就職活動・就業定着支援である。但し、ASD 学生に対しては、学内スタッフであるメンタル・ウェルビーイング・アドバイザー (Mental Wellbeing Adviser) によるカウンセリング・サービスが提供されている。

同大のチーム・サポートの特長について、同大のサポートを受けた元 ASD 学生の意見を聞いたところ、メンターへの信頼関係が常に保たれていて、何を支援してほしいか分からないときにも相談できること、スタディ・スキル・チューター

からは勉強にどう取り組むかについての特性 (例えば、なんでも完璧に仕上げないと気が済まない) に応じたアドバイスが受けられたり、アイデアの整理を手伝ってくれたり、ツール提供をしたりしてくれたことが助かった、とのことであった。

### 3-2. 質問 2 : 支援組織の運営資金はどこから拠出されているのか?

英国では、障害学生支援のための政府助成金である Disabled Students' Allowance (以下、DSAs) が本人に支給され、それを財源として大学で支援が行われている。例えば、スタディ・スキル・チューターのサポートを受けるために、1時間当たり約 £65 (約8,500円)、メンターのサポートを受けるために、1時間当たり約 £45 (約6,000円) が支給される。個々の学生毎に、必要に応じてこれらのサービスを受けられる時間数が定められているが、ASD 学生は、大学在籍の全期間を通じて必要十分な時間数に基づく助成金支給が認められることが多い。ただし、留学生は DSAs から助成金を支給されないため、支援に必要なコストは同大の運営予算で賄っている。

### 3-3. 質問 3 : 学生に対する支援を開始するための手続きはどのように行われるか? アセスメントはどのようにして行われ、支援を受ける学生の周囲 (教職員や他学生) に、どのようにその情報が伝わるか?

英国では、入学の数ヶ月前から、どの大学に入学するかが決まることが一般的である。入学が決まった時点で、その大学に医療機関において ASD の診断を受けた学生からの申し出があり、そこから支援がスタートする。医療機関からは、臨床心理学者 (clinical psychologist) による詳細な診断書が送られてきている。

支援の申し出があつてすぐに、コーディネーターが学生と、ほとんどの場合は保護者も一緒に初回面談を実施し、修学ニーズについての詳細なアセスメントを行う。入学の数週間前には2回目の面談を行い、メンターやスタディ・スキル・チュー

ター、学部教員などの主要サポート・メンバーと本人との顔合わせを行う。

アセスメントでは、診断書に記載された障害名や特性とも照らし合わせて、修学上においてどのような影響があるかを見立てている。例えば、「社会的コミュニケーションに困難があるので、グループワークのスタイルを採用する授業ではサポートが必要である」という修学ニーズを、学生との丁寧なやりとりを通じて見出している。

コーディネーターは、修学ニーズとそれらに基づき提供されるサポートが記されたアグリーメントを、関係教職員に電子媒体にて配布している。

### 3.4. 質問4：どのように支援の目標設定や支援目標にもとづく評価をしているのか？

個々の学生に対する支援目標の評価としては、個別のメンタリング計画 (Individual Mentoring Plan) に沿って、何が達成されかを振り返っている。また、年度末には、支援を受けた学生にフィードバックしてもらい、その内容を来年度の支援に活かしている。

一方、支援体制全体としての評価には、以下の3つの指標がある。1) 支援を受けている学生が大学生活をマネジメントして、退学することなく、学位を取得することができるか。但し、うまく対処できずに退学になったが、次年度に再度大学に戻ってきて、より現実的なアイデアに基づいてサポートされるケースも実際にあった。その状況、その時点においては、退学が良い意思決定になることもあり得る。2) 学生が入学時よりも支援者に依存しなくなってきたか。3) 学生が大学生活を楽しむことができているか。

### 4. 調査結果2：シェフィールド・ハラム大学での支援

シェフィールド・ハラム大学 (Sheffield Hallam University) は、イングランド中部にあるシェフィールド (Sheffield) にある総合大学である。同大には自閉症センター (The Autism Centre) があり、ASD 児・者への支援者養成と

研究を行っている。当センターは、教育者だけではなく、地域の支援施設のスタッフへのトレーニングも行っている。

同大では、包括的な障害学生支援体制の中で ASD 学生の支援を行っており、ハートフォードシャー大学と同様に、診断のある学生のみをサポートしている。同大の学生総数は約30,000名だが、そのうち障害学生数は約2,500名であり、そのうち1,550名が継続的な支援 (regular support) を受けている。2,500人のうち700人がディスレクシアとディスプラキシアがあり、ASD 学生は30名である。

同大のアセスメント・センター (Assessment Centre) によって、修学上のニーズについてのアセスメントが行われ、学生と支援のための契約書を交わし、関係スタッフに回覧している。

同大には、ディスアビリティ・アドバイス・サポート・サービス (Disability Advice and Support Service) 部門があり、そこに150名のサポート・ワーカー (メンターやスタディ・スキル・ワーカー含む) が在籍している。ASD 学生支援は当部門が担当しているが、視覚・聴覚障害支援、ディスレクシア・ディスプラキシア支援、メンタル・ヘルス・ケア・サービスを行っているインクルーシブ・プラクティス (Inclusive Practice) 部門との協同も行っている。特に同部門のメンタル・ヘルス・ケア部署との連携は重要だが、ASD 学生へのメンタル・ケアは十分ではなく、今後の課題である。

入学前の支援としては、アウトリーチ型支援を行い、地域の高校に出向いて進学についての相談を受けつけている。入学の半年以上前から支援を行うケースもある。

同大では、最近になって、ピア・サポーター学生の募集を始めた。聞き取り調査時点で、4人のピア・サポーター (Buddy) がいる。Buddy に重視される資質は、信頼できて、特に約束 (の時間等) を守れることである。ASD 学生の支援にあたって、Buddy を事前にトレーニングをする必要があるが、特に重要なのが、支援の限界設定

をすることである。何に対して支援し、何に対して支援しないかを明確にし、それを守らせることが重要である。

### 5. 調査結果3：ケンブリッジ大学での支援

ケンブリッジ大学 (University of Cambridge) は、イングランド東部にある総合大学で、大学全体では18,000名の学生が在籍する。聞き取り調査の時点で、同大の障害学生は1,102名いるが、そのうち515名が知的障害のない特定の学習障害で、ASD学生は45名である。

ケンブリッジには31の独立性の高いカレッジがある。カレッジ独自の障害学生へのサポート体制がある場合もあるが、ディスアビリティ・リソース・センター (The Disability Resource Centre) が全てのカレッジをカバーして障害学生支援を行っている。

同大では、アスペルガー・プロジェクト (Asperger Project) を2009年8月から開始し、ASD学生への支援に本格的に取り組み始めた。4人の専門スタッフによるメンバーで構成された同プロジェクトでは、支援の開始前に、支援を必要とするASD学生のニーズを集めると同時に、教員にアンケートをとり、彼ら/彼女らにどのような配慮が必要なのかを把握した。

どのような配慮が必要かどうということを理解した上で、現在では、個別的で具体的な支援が行われているが、ASD学生の持つ強みに関心を持ち続け、それを将来に活かしていこうとする支援の在り方を模索している。

ASD学生支援に関して、同大の抱える課題は、以下の3点であった。1) 二次障害への対応としてのメンタル・サポート、2) 保護者とのコンタクト、3) ASD学生の言動に共感できない周囲の教職員や学生への働きかけ。

### 6. 調査結果4：プロスペクツでの支援

プロスペクツでは、企業支援・連携 (Corporate Support and Liaison)、雇用トレーニング (Employment Training)、就業準備プログラム

(Client Preparation Programmes)、学生・卒業生支援 (Student and Graduate Support) の4つの支援部門がある。学生・卒業生支援部門の中でも、学生支援プログラムは、プロスペクツの本来の業務である就労支援に直結しないサービスであるが、教育から就労にスムーズに移行することを手助けするためのユニークなプログラムである。当該プログラムによって提供されるサポートは、学内における支援と同様に、すべてDSAsによる助成金によって賄われるため、学生の個人負担はない。

当部門には、11人のサポート・ワーカーが配置されており、聞き取り調査の時点で、50人のクライアントがいた。学生や保護者によるコンタクトが多いが、ASD学生への支援が十分でない大学のスタッフからのコンタクトもある。

サポート・ワーカーは大学に出向き、クライアントに対して1対1の直接サポートを行っている。週に1度、1時間のメンタリング・セッション (Mentoring Sessions) が主な支援内容であるが、その中で、時間管理スキル (Time Management Skills)、整理スキル (Organizational Skills)、コミュニケーション・スキルの開発と、さまざまな社会的な状況における対応への自信を持ってもらうための支援を行っている。

サポート・ワーカーは、大学内スタッフのスタディ・スキル・チューターやパディとも連携し、学内支援ネットワークを形成し、大学内で啓発活動を行っている。

さらに、サポート・ワーカーは、学生対象のワークショップを、ロンドン市内にあるプロスペクツの事務所にて開催している。行われている。ワークショップの内容は、以下の6つが、1回につき2時間半ほどを費やして実施されている。1) 大学における不安の対処やストレス管理 (Dealing with anxiety and managing stress at university)、2) 大学における社会的コミュニケーション・スキル (Social and communication skills at university)、3) 動機付けと整理スキルの向上 (Improving your motivation and

organizational skill)、4) 障害への気づきと自己擁護 (Disability awareness and self-advocacy)、5) 就職とインターンシップについてのスキル開発 (Development skills for placements and internships)、6) 大学卒業と移行プランニング (Planning for graduation and transition from university)。

学生支援プログラムを受けた学生が卒業すると、同部門のもう1つの取組みである移行 (transition) プログラムを受けることができる。このプログラムにおいて、就職活動支援が行われる。採用されると、プロスペクツ内の他の部門で行っている職場サポートへとスムーズに移ることが可能となっている。

## 7. 考察

英国内の3つの大学およびプロスペクツへの聞き取り調査結果に基づき、以下の4点について考察する。

1) 英国においては、学内支援は、公的なサービスの一環として、学生個人に助成金が給付される。英国でも支援者養成は各大学が担っているため、学生への助成金給付が行われることが、どの大学でも適切な修学支援が行われることを保障するわけではない。しかしながら、学生への助成金給付制度が大学における ASD 学生支援の持続可能性を高めることや、プロスペクツのような学外の専門組織の介入を可能にしている点において、学生にとっては有利な制度になっていると考えられる。

一方で、助成金を受けるためには、支援に先立ち、医療機関による診断と修学ニーズについてのアセスメントを経て、支援についての正式なアグリーメントを取り交わす必要がある。そのことは、診断はつかないまでも、自閉症傾向があるが故に修学に困難をきたしている学生は支援が受けられない、という問題も生じるだろう。自閉症の概念がスペクトラム (連続体) である以上、どこで支援の線引きをするかは、難しい問題である。

2) 入学前からの移行サポートが充実している。

数ヶ月前から実質的に入学が決まる入試システムの効果も大きいですが、ASD 者が一般的に新しい環境に適応するのが苦手であることを踏まえれば、特性に応じた合理的で効率的なアプローチだと言える。

一方、学内におけるキャリア・サポートは十分でないが、プロスペクツでは、それを補完するサービスとして、キャリア・サポートに直結する学生支援プログラムを展開している。社会的スキル・トレーニングやキャリア教育に相当するワークショップへの ASD 学生のニーズは高いと思われる。

このような移行支援には、共通の利害関係や目的、価値観を持たない組織・機関同士の連携が必要となるが、そのような連携を成立させるネットワークをどのように成立させていくのか (吉永, 2010) が鍵となる。プロスペクツは、このようなネットワーク形成を得意としている支援機関なのかもしれない。現に、プロスペクツは、ASD 学生支援のノウハウが確立していない大学での支援ネットワーク形成を行っている。このことは、ASD 学生の在籍数が少なく、支援の充実が急速には見込めない小規模大学における効果的な支援にもつながっているだろう。

3) 個別のニーズに応じたチーム・サポートが ASD 学生への支援の基本原則であって、具体的な支援は個別のかつ教育的に行われている。専門家による支援の機能分化が行われているが、包括的な支援が志向されているため、コーディネート及び情報共有をスムーズにする体制作りが重視されている。

一方、小規模大学においては、予算不足により障害学生支援に関わる支援エネルギーが慢性的に欠乏することが容易に想像されることから、コーディネーター、メンター、スタディ・スキル・チューターの機能を別々のスタッフが担うことは難しいかもしれない。それを補うための工夫としては、スタッフ一人ひとりが上記の機能を全て兼ね備えながらも、プロジェクト・マネジメントの仕組みを積極的に導入して、ケースや状況毎に支援スタッフの役割を柔軟に変えていくことが求められる

(吉永・斎藤, 2010)。

4) 英国においては ASD 学生に対するメンタル・サポートは学内では十分に行われていない。社会的コミュニケーションの困難さを抱える ASD 学生にとって、修学や新しい環境への移行には困難がつきものである。英国の支援スタッフは、ASD 学生が自己効力感を維持し、または高めながら、新しい環境を乗り越えて成長することを可能とするためのアプローチを模索しているのかもしれない。

## 8. まとめと今後の課題

本稿では、英国の3つの大学および高機能 ASD 者に特化した就労支援機関のプロスペクツにおける学生支援について検討した。その結果、英国における ASD 学生支援は、支援の公的サービス化、移行支援の重視、複数の異なる専門家・機関が協同する包括的支援、の3点が特徴として挙げられる一方、診断のない ASD 傾向の学生へのサポートや、ASD 学生へのメンタル・サポートに課題を抱えることが明らかとなった。

今後の課題として、上記の知見を国内大学での ASD 学生への支援にどのように活かすべきかの観点から、検討を行うことが考えられる。具体的には、1) ASD (傾向含む) 学生支援の持続可能性 (sustainability) の確保、2) 学内サポート・チームと学外ネットワークの形成によるスムーズな移行・連携支援方法の確立、3) ASD 学生への修学・移行サポートとメンタル・サポートの両立、の3点に論点を集約できると考えられる。

## 謝辞

本研究は、科研費若手研究 (B) (課題番号21730294) 「高機能広汎性発達障害者の特性を活かす組織のデザイン」および文部科学省新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム (学生支援 GP) 「「オフ」と「オン」の調和による学生支援」の助成を受けて行われた。

## 引用文献

- 1) Her Majesty's Government. (2010) : "Fulfilling and rewarding lives" The strategy for adults with autism in England. [http://www.autism-anglia.org.uk/downloads/dh\\_113405.pdf](http://www.autism-anglia.org.uk/downloads/dh_113405.pdf)
- 2) Hughes, M., Milne, V., McCall, A., and Pepper, S. (2009) : Supporting Students with Asperger's Syndrome. The Higher Education Academy Physical Science Centre.
- 3) 日本自閉症協会 (2005) : 自閉症ガイドブック : 別冊 海外の自閉症支援.
- 4) 鈴木秀一 (2010) : 海外レポート : 英国における知的障害を伴わない発達障害者への支援方法について. 高齢・障害者雇用支援機構障害者職業総合センター, 職リハネットワーク, 66, 64-70.
- 5) 吉永崇史 (2010) : 自閉症スペクトラム学生への就職活動支援. 学園の臨床研究, 9, 47-56.
- 6) 吉永崇史・斎藤清二 (2010) : システム構築と運営のためのナレッジ・マネジメント. In (斎藤清二・西村優紀美・吉永崇史) 発達障害大学生支援への挑戦—ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント, 金剛出版.

